

思想史のなかの雑誌メディア

長 志 珠 絵

人文社会科学の世界では近年、様々な学術企画に「メディアとしての〜」「〜というメディア」というタイトルがある。本学会での過去の大会シンポジウムでも二〇〇三年、「思想を語るメディア——近世日本を例として」が設けられた。ではそもそもメディアとは何か、そこではむしろ、メディアという視座を敢えて立てることで、そこから新たな問題領域の再定義や対象を広げ、さらには新たな発見や、そして何よりも、既存の知的・学的認識地平への問いかけが試みられている、と考えるべきだろう。メディアという社会との関係性のツールを意識する議論は、思想（史）研究として、異なる時代での有効性も含め、メディア・メディア論への問いかけとして、方法や対象に関わってまだ多く議論の余地を残す。その原義に仲介・介在といった媒介作用を帯び、マクルーハンによれば環境や身体との関係をも含み込む「メディア」は、身体と世界の構造化を成り立たせる多義性を帯びた概念でもある。思想や言説とその意味作用が、それらを取り巻く社会との相互関係において立ち上がると捉える際、媒介としての（メディア）の歴史性・可変性を思想史研究として問う視座が改めて課題となるだろう。

二〇一六年度大会テーマは敢えて狭義のメディアが制度化される、一九〜二〇世紀に対象時期を限定したう

えて、「思想史のなかの雑誌メディア」とした。「雑誌」というくくりを設定することで、近代国家形成期と大衆化の時代という、いわば歴史的展開家庭のことなる時代にとつてのメディア特性の違い、それぞれのメディアが置かれた二つの時代そのものと思想の言説の置かれた位置の違いも明確になることと思う。そのうえで、報告者にはそれぞれの時代のメディア史・思想史を論じてこられたお二人にお願した。一人は、一九世紀の近代国家黎明期のナシヨナリズムを明治青年の思想活動を介して展開し、あるいは公文書の管理体制を俯瞰して記録のメディア性にも議論をひろげていこうとされる中野目徹氏、もう一人は、教養主義や岩波に代表される知識人メディア、最近では検閲問題にも踏み込んで、二〇世紀のメディア史研究を発信してこられた佐藤卓己氏である。雑誌メディアが置かれた歴史的環境や焦点のあたるアクターの違いとそこから提起される論点がどのような問いをもたらすのか。本テーマを直接間接に専門とするコメンテーターおよび司会のお二人からの問題提起もいただきながら、当日の議論の深まりを期待したい。また大会実行委員会では、近世社会でのメディアをも考えるべく、シンポジウム関連のパネル企画も同時に準備した。実りある議論が展開されることとと思う次第です。

(神戸大学教授)